特別講演

周南市域：勤王の志士たち

山口県地方史学会名誉会長　小山良昌

はじめに

過日、当地方史研究会において、「周南地区：勤王の志士たち」のタイトルで講演をさせて頂き、徳山藩の殉難七士を含む総計二三名の志士について紹介した。

演題を「勤王の志士たち」と付した根拠は、実は毛利家の遠祖は平安初期の平城天皇に至り、特に毛利元就以来、毛利家は朝廷に対して経済的な支援も含めて勤王に務め、江戸時代には三〇〇諸侯中唯一の皇族系大名として存在しており、朝廷への献銀は徳川幕府公認であった。藩主毛利家が皇族系であることは、当然家臣や藩民の思想や行動にも反映し、特に幕末の長州藩では吉田松陰や高杉晋作をはじめ多くの藩士は毛利家臣であることを誇りとして勤王活躍に身を捧げ、農工商人や神官・僧侶・力士などの藩民も奇兵隊や農兵隊など多数の諸隊を結成して勤王活動を行った。

徳山藩においても、殉難七士事件は俗論派家老たちに対する勤王藩士による抗争の結果発生したものであり、また、勤王を奉ずる農町民によって稜威団や山崎隊が誕生した。

この度、当研究会誌に講演に関わる内容の掲載要請があった折に、幕末維新期にかけて活躍した周南市域の志士は二三名だけなのか。二三名以外にも志半ばで逝去し

た多くの志士がいるのではないかと思い立ち、出来れば志半ばで逝去した志士たちの名前だけでも掲載したいと考えるに至った。そこで、改めて幕末維新期に活躍した志士について、記録として残されている資料の再調査を行い、網羅して紹介することとした。

なお、毛利家史編纂員の時山弥八が大正二年に編集した『旧長藩殉難者名録』によると、長州藩が馬関において攘夷戦争を始めた文久三年（一八六三）五月から、戊辰戦争を終えた明治二年（一八六九）五月までの六年間に、実に八五二名の死亡者が記録されている。各藩別の犠牲者数で云えば、長州藩は間違いなく最大の死亡者を出して、明治維新を成し遂げたことになる。その内、周南市域の死亡者は四五名を数える。

紹介した志士については、新たな資料も含めて再調査を行った結果、紹介する志士数が五七名と倍増したため、紙面の字数制限の関係から極力要旨の紹介に努めた。また、児玉次郎彦ら殉難七士については、多々紹介図書があるので単略に紹介するにとどめ、山崎隊員についても既に『山崎隊入隊人名録』が出版されているので省略した。

I、徳山藩殉難七士

江村彦之進（一八三二～一八六四）：興譲館訓導、海防局長、会計局長。尊王攘夷の大義を唱導藩内の正義派の一味と目され、一八六四年八月惨殺。従四位。三三歳

児玉次郎彦（一八四二～一八六四）：興譲館学寮長。大目付。忠君の忠義心厚く、尊王攘夷を説く。家老冨山を殺害せんとして果たさず、一八六四年八月惨殺。従四位。二三歳

井上　唯一（一八四二～一八六四）：勤王を唱え、奇兵隊に入隊。深く同志と結託し正義派の一味と見なされて捕縛。一八六四年一〇月処刑。従四位。二三歳

河田　佳蔵（一八四二～一八六四）：先鋒隊の取締役。天朝への忠義心厚く、伯父にあたる家老の冨山を殺害せんとして果たさず。一八六四年一〇月処刑。従

四位。二三歳

浅見安之丞（一八三三～一八六五）：興譲館の槍術指南役、訓導役。忠君の志厚く、正義派の中心人物として捕縛され、一八六五年一月惨殺。従四位。三三歳

本城　清（一八二五～一八六五）：尊王論者。興譲館の学館長兼代官役。正義派のリーダーと目され、無実の罪で一八六五年一月惨殺。従四位。四一歳

本城　清　周南市立中央図書館蔵

信田作太夫（一八二五～一八六五）：勤王の志士と交友し忠君の志厚く、正義派の中心人物と見なされ捕縛。無実の罪で一八六五年一月惨殺。従四位。四一歳

Ⅱ、萩藩関係者

寺島　秋介（一八四二～一九一〇）：藩士。熊毛郡原村生。太次郎長男。忠三郎の兄。

下関攘夷戦争や禁門の変に参戦。有栖川熾仁親王の副参謀として、上野戦争では団子坂口総指揮官。奥羽鎮撫総督参謀として奥州を転戦。戦功により賞典禄四五〇石を下賜。脱隊騒動に際し木戸孝允に随従して鎮圧。西南戦争では警視隊編成に従事し、陸軍大尉兼一等大警部。その後、官僚として活躍後、元老院議官・錦鶏間祗候に就任。男爵を叙爵し、貴族院勅撰議員に就任。六八歳

寺島忠三郎（一八四三～一八六四）：藩士。熊毛郡原村生。寺島秋介弟。変名は作間忠三郎など。

明倫館に学び居寮生。吉田松陰に兵学文学を学ぶ。

高杉、久坂らと御楯隊を結成。長井雅樂暗殺計画にも参加。江戸では勅使転法倫、青蓮院や鷹司家の常詰を勤める。一八六三年八月一八日政変の後、久坂らと長州藩復権に向けて尽力。禁門の変では京都御所に向けて進軍。鷹司邸内で久坂と刺し違えて自害。正四位。二一歳

忠三郎の死後、藩は破格の処遇として「身柄一代無給通」に採用した。

堅田少輔（一八五〇～一九一九）：萩藩家老。都濃郡湯野村。萩生。堅田就正嗣子。

一八六五年八幡隊総管。四境戦争時には山代亀尾川、豊前小倉へ出陣し戦場を転戦。戊辰戦争では山陽道出兵総督となり備後福山城を攻略。姫路城や松山城を降伏調印など戦功大。一八七一年米国コロンビア大学へ留学。帰国後は工部大学校、山口高等中学校教授、高等官五等、衆議院議員、周陽中学校長など歴任。六九歳

西郷吉甫（一八四三～一八六八）：家老堅田家臣。人となりは機敏、良く剣を扱う。

四境戦争では堅田少輔に扈従して亀尾川、小倉に戦い、常にその先駆けをなす。翌年藩の鋭武隊に編成され入京。戊辰戦争では鋭武隊半隊長となり、磐城駒ケ嶺戦では賊を破り追撃するも、負傷して戦死。二五歳

三戸三男（一八四八～一九〇一）：家老堅田家臣。湯野村生。初め福永三男。

一八六三年奇兵隊に入隊するも堅田氏から帰郷命令を受け帰宅。翌年諸隊追放令が出ると再び奇兵隊に入隊。大田絵堂で本藩先鋒隊と戦う。四境戦争では堅田散兵隊伍長として亀尾川、小倉と転戦。一八六七年山口洋学校に入学し、村田蔵六に蘭書を学ぶ。翌年堅田氏が山陽道出兵総督の際には、鋭武隊四番小隊嚮導となり福山にて戦い、次いで西郷吉之助に随い東下して東台に戦い、上総国各地を転戦。英国艦に乗船して平潟へ上陸し、各地を転戦して奥州駒ヶ峰で負傷。五三歳

戸沢竹次郎（一八四〇～一八六八）：家老堅田家臣。奇兵隊員。

一八六六年小倉口の戦に戦功有。一八六八年鳥羽伏見戦に出兵し淀川堤にて戦死。東福寺に葬る。藩主は功を賞し、遺族に毎年米一人半を支給。靖国神社に合祀。二九歳

Ⅲ、徳山藩関係者

松野　頴（一八四二～一八六四）：藩士。徳山村生。興譲館に学び文学寮常居生。

一八六三年親兵に選ばれ上京。勤王の志強く、本藩の久坂や桂らと交友。孝明天皇の攘夷祈願の行幸に供奉。七卿の西下を護衛して長州へ。藩の密旨を帯び、山陽道各藩を探索して上京。興譲館文学寮舎長に就任。藩吏の姑息を憤り、児玉次郎彦らと密計。禁門の変では会津兵と戦い捕虜となり入獄。獄中会津藩の不忠を罵倒して斬首・獄門にされた。藩主は遺族へ祭祀料として一〇年間米一〇俵宛下賜。二二歳

先山倫之丞（一八四三～一八六四）：藩士。徳山村生。興譲館の文学寮常居生。

藩吏の姑息を憤り、児玉次郎彦、遠藤貞一郎らと密かに計画。一八六四年藩主の密旨を持って上京し、禁門の変で会津兵と戦い戦死。藩主は遺族へ祭祀料として一〇年間米一〇俵宛下賜。二一歳

岩崎　環（一八二九～一八七六）：藩士。徳山村生。謙のち田中黙爾、岩崎黙二。

一八四八年～藩の漢医浅田杏伯、大坂の緒方洪庵塾で修行。一八五四年～長崎・萩で学ぶ。一八六三年医書を捨て、奇兵隊へ入隊し高杉らと国事に奔走。興譲館文学寮舎長。江村彦之進、本城清らは藩政改革を議し、しばしば環へ意見を聴取。一八六四年藩主の密旨を帯びて上京の途次、禁門の変の敗北を聴き帰国。藩要路の不忠を憤り、児玉次郎彦らと密計を立案。八月突然本城清らと濱崎牢に入牢。獄舎の室は半坪、周囲は石で囲われ、隙間は土で固め、中央に「三字形」の石を敷く石窟。食事は一日三度一

塊りの握飯。魚菜はなく塩を交えるのみ。呵獄と云うべし。二年の入獄にて健康を害す。一八六六年解放され、山崎隊総管に就任。維新後は養蚕所都合役、玖珂郡広瀬学校教授など歴任。四七歳

福間壽昭（一八〇七～一八八五）：藩士。徳山生。丙のち山名五郎兵衛、福間五郎兵衛。性は温良忠直、良く人を容れる度量あり。藩の五老の一つ。壽昭も要職数一〇回、功績少なからず。

常に正義派の首領に推され、七士達と同時期に自宅に幽囚。俗論派は彼の割腹を建言するも藩主は容れず。七八歳

内山国雄（一八四五～一八七五）：藩士。徳山生。久米之進のち内山正太郎など。

一八六一年頃京師に登り、藩士志田作太夫に随い時事を窺う。一八六三年奇兵隊へ入隊。一八六四年～奇兵隊を出て大楽源太郎の西山塾に入門。京師へ登り、久坂らと国事を周旋。池田屋の変で負傷。一八六六年大野丹下らと山崎隊を創設。君側の奸を除き藩論を正論にする。一八六七年献功堂会議所詰、次いで献功隊書記。函館戦争では参謀林与を助けて戦功大。維新後は藩政府の書記役、東京公用人。開拓使松前県官取計。内務省に出仕して警保局勤務。在職中病没。三〇歳

兼崎昌司（一八二一～一八六二）：藩士。徳山生。号は橙堂。興譲館にて漢学を修業

一八三八年～大坂の斎藤塾、萩明倫館、再び斎藤塾で勉学。一八四八年家名断絶。大坂堺で漢学塾を開く。一八五一年家名再興、家禄二〇石。興譲館算用役、教授助手。一八五三年藩主・元蕃は江戸詰めを命じた。江戸番手となり、佐久間象山に西洋流兵式を学び、斎藤道場で剣術を修める。この時期、吉田松陰もまた象山に師事し洋式砲術を学ぶ。相州警衛の陣営へ出張し、大浦山砲台の監察兼大砲方を務め、本藩諸士と時事に通暁。特に上宮田陣営に駐在していた来原良蔵らと親交を深めた。一八五六年高島流の鼓譜、銃砲術、隊列操練等の免状を得て一八五八年

には藩の西洋流銃陣教範。西洋流精励を賞され年々銀五〇匁を賜う。一八六二年江村彦之進らと共に徳山を出立。江戸から藩主に扈従して上京。京坂間に不穏な動き。京都で萩藩士と連携し国事に尽す。この時、長州藩は朝廷へ攘夷を説く京周旋を行っている。同年八月徳山藩寓居・京都大徳寺にて病没。四二歳

兼崎昌司(橙堂)　兼崎地橙孫顕彰会蔵

遠藤貞一郎（一八四〇～一八八八）：藩士。徳山村生。別名儀右衛門、白井貞一郎。肥後木下塾、江戸安井息軒の三計塾入門。熊本町野塾で医業を修む。一八六二年御殿山夷館への放火に組し、高杉ら志士と交友。翌年奇兵隊に出入りし総督顧問。高杉らと江戸、京都、山口など奔走。藩主参内に陪席し、席上大いに尊王攘夷の大義を論じ、諸士の志気を鼓舞。若殿の近侍、両人役見習、興譲館文学寮長を兼務。一八六四年藩政改革に尽力し、禁門の変後幕府に捕縛され新見藩邸へ幽囚。一八六六年特赦により帰国し、近侍長兼献功堂長に就任し、藩の参政に昇格。山崎隊総督兼務を命じられ、四境戦争では山崎隊を率いて小倉口へ出陣。一八六九年世子の英国留学随行。併せて留学を下命。翌年帰国。脱隊事件では勝坂口へ出兵し討伐。藩の権大参事に就任、長年の功労を賀して藩主から備前大兼光一刀を賜う。一八七二年伊藤博文兵庫県知事の後任として推薦されるが辞退。山口県庁応接掛、内務省三等属、大津郡長、赤間関区長、山口県御用掛等勤務。四八歳

遠藤守一（一八四四～一八八〇）：藩士。

一八六三年奇兵隊に入隊し一番小隊司令。馬関攘夷戦に戦功大。大田絵堂の戦いで萩藩兵と戦い、敵将財満新三郎を討取る。一八六六年の四境戦争では小倉口に戦い戦功を上げ、総督高杉から肥前忠吉銘懐刀を下賜。戊辰戦争では羽州庄内藩と戦い、抜刀して先陣を切り、大小幾度の戦いに勝利。諸兵は「守一兵を用ゆる神の如し」と称賛。身に銃丸傷一三ケ所、帯びる刀は鋸歯の如し。陸軍少佐に任ず。従六位。三七歳

林　与（一八四三～一八六九）：藩士。

一八六二年藩主元蕃の京都守衛では藩主前衛役を勤む。一八六四年藩命に依り筆商人林屋与右衛門と変名し、京摂を探索。戊辰戦争では献功隊参謀兼軍監として北越口へ出兵し、函館戦争では江差へ上陸。賊兵と大激戦し、大川村にて戦死。藩主より一時金一二両、一〇ケ年米一〇俵宛下賜。靖国神社に合祀。正五位。二六歳

林　与　周南市立美術博物館蔵

石田順作（一八二六～一八六七）：富田農人のち藩士。

農業の傍ら国学、和歌に精通し、勤王の大義を唱え、四方の志士と交友。一八六三年徳山藩に抜擢され、海防方大砲鋳造局用掛に就任。藤井孝太郎らと謀り、善宗寺で同志二〇余人と稜威団を結成。剣槍弓柔を練り以て軍用に備えるも藩命により解散。一八六四年禁門の変には萩藩世子上京せりと聞き、同士二〇余人を糾合し、機械弾薬糧食を備えて上京の途次、変の敗戦を知り帰国。同志二〇余名と奇兵隊に入隊を希望するも藩に阻止。殉難七士の難に連座して逼

塞。一八六五年山崎隊設立には周旋方を下命尽力。山崎隊総管大野らは君側の奸を除かんと画策。順作は大野らの功を助ける。藩は国事尽力の功績により、身柄一代茶道格に列す。のち紙商に扮して京摂の間に動静を探るも病死。四一歳

藤井孝太郎（一八三八～　？　）：福川町人のち藩士。常に勤王を唱え、志士と往来す。

一八六三年徳山藩に抜擢され、海防方大砲鋳造局用掛に就任。時事探索のため京摂を視察して報告。石田順作らと謀り、善宗寺で稜威団を結成。剣槍弓柔を練り軍用に備えるも藩命により解散。参加者二〇余人。一八六四年藩の兵糧方用掛に就任。禁門の変後、勤王七士が殺害されると連座して逼塞。一八六五年山崎隊結成には周旋方に就任。山崎隊総管大野丹下の活躍を助力。藩は国事尽力の功を賞し、身柄一代切米三石を給し、年寄格に進め、苗字帯刀を許可す。年不詳

渡辺九八（一八三六～一八六四）：小畑村農人。性は果毅朴実、常に義を重んじ、国家有事には身を犠牲に供する志あり。

一八六三年攘夷の勅下るや、赤間関で奇兵隊に入隊。一八六四年隊士冷泉雅次郎が罪有りて閉居。九八は監卒に加わり、日夜冷泉の側に居て読書談笑し、尊攘を談じ、共に志を遂げる約束。後日、萩の冷泉家を訪問すると、冷泉は上京せんとする時。九八は冷泉の手子役として共に上京。禁門の変直前、九八は藩の密書を天龍寺の来島又兵衛へ届け、帰途会津兵に捕縛。一時脱出するも捕まり処刑。冷泉は故九八の為に「渡辺某行状」を記して九八を顕彰。その文の最後に、「元治乙丑（二年）四月某日　友人冷泉御民揮涙状之」と書す。二八歳

石田三千井（一八四五～一八六六）：富田村生。姓は橘　名は延壽

一四歳の時父母逝去。喪中に実家の火災で兄・家財を焼失。弟に「我は書を読みて医業を志し家業を興さんと」。長府次いで萩で従学して切磋琢磨す。

一八六三年夷人の陸梁を憤り八幡隊に入隊。八幡隊の精鋭に選ばれ、馬関へ赴き、一八六六年大田絵堂の戦いで戦死。二一歳

河村梅吉（一八四七～一八六八）：湯野村農人弥三郎次男。整武隊員。

四境戦争では芸州口、小倉口に出陣し大いに功あり。鳥羽伏見戦では鳥羽街道で幕軍と戦闘し、負傷して三田尻へ後送され没し桑山に葬る。藩は遺族に毎年米一人半を支給。靖国神社に合祀。二一歳

片山金次（一八四四～一八六八）：都濃郡久米村の農人周吉男。第二奇兵隊嚮導。

鳥羽伏見戦で伏見高瀬川堤にて戦死。東福寺に葬る。藩は遺族に毎年銀四百目を支給。靖国神社に合祀。二四歳

小林隼太（一八三七～一八六八）：徳山芳屋町人又吉弟。振武隊隊員。

鳥羽伏見戦では幕兵を追って大坂城に入り、敵の埋没せる地雷により城内で憤死。東福寺に葬る。藩は遺族に米一人半を支給。靖国神社に合祀。三一歳

秋元喜一郎（一八五一～一八六九）：山崎隊員。

鳥羽伏見戦に出兵奮戦。一〇月三田尻出船して秋田土崎港着。函館戦争に参戦し、赤神雨垂石両所に戦い戦死。一八歳

Ⅳ、『旧長藩殉難者名録』掲載関係者

「京師変動」一八六四年七月

池辺庄蔵	堅田家臣	遊撃隊	京都	戦死二三歳
福谷林兵衛	徳山藩士	献功隊	京都	戦死 不詳
大町国太郎	鹿野人	斎藤門下	六角牢	牢死 不詳
木村嘉六	都濃農人	金剛隊	京都	戦死 不詳

「馬関攘夷戦争」一八六四年八月

町田道之助	長穂農人	奇兵隊	馬関前田	戦死 不詳

「戊辰戦争」一八六八年一月～六九年四月

福島男也	徳山人	医者	山城八幡	戦死二八歳

戸沢竹次郎　堅田家臣　奇兵隊　淀川堤　戦死二九歳
生瀬清見　堅田家臣　鋭武隊嚮導　江戸上野　戦死三二歳
池永小五郎　堅田家臣　鋭武隊　江戸上野　戦死二二歳
原　虎之助　堅田家臣　鋭武隊　江戸上野　戦死　不詳
久山寿之進　堅田家臣　鋭武隊　江戸上野　戦死二一歳
椋木直人　堅田家臣　鋭武隊　江戸上野　傷死二〇歳
井上四郎　堅田家臣　鋭武隊　磐城駒ケ峰　傷死一九歳
高橋市郎　堅田家臣　鋭武隊　磐城駒ケ峰　負死二六歳
西郷小源　堅田家臣　鋭武隊　磐城駒ケ峰　傷死三三歳
弘中清助　堅田家臣　鋭武隊　磐城駒ケ峰　戦死三一歳
松野栄吉　大津島農人　夫卒　羽後秋田　傷死　不詳
金子猪三郎　櫛ケ浜　第一大隊　岩城白河　戦死一九歳

「函館戦争」一八六九年四月～五月

宇田新三郎　徳山藩士　献功隊　大川村　戦死二九歳
古志義人　徳山藩士　献功隊　上山村　戦死三七歳
島田卓熊　徳山藩士　献功隊　大川村　戦死二九歳
池田満之進　富田村農人　山崎隊　茂草野　戦死二四歳
中村寛三郎　富田村農人　山崎隊　函館　戦死二六歳
佐伯三保三　福川村農人　山崎隊　茂草野　戦死二九歳
瀬来道三郎　山田村農人　山崎隊　折戸　戦死二六歳
戸倉太一郎　中山農人　山崎隊　茂草野　戦死二〇歳
権吉　福川村農人　山崎隊　茂草野　戦死二三歳

以上五七名

参考文献：『明治維新人名辞典』『近世防長人名辞典』『鳥羽伏見：戦没殉難志士伝』『旧長藩殉難者名録』『徳山藩改易　徳山殉難七士』『防長維新関係者要覧』
※山口県文書館所蔵
毛利家文庫：「志士列伝」「維新功労者履歴」
山口県庁戦前資料：「贈位者調査ニ関スル件」「維新功労者調」